

いて歸るんだ。」

若しそれが、人前でなかつたら、吾助は我が娘の心得違ひを、その場でどんなにはげしく叱りつけたかも知れなかつた。でも、大勢の人前では、つゝしまなければならなかつた。

「ねえ、千代子さん。お父さんがあゝおつしやるんですから歩いて歸りませうよ。わたしたちには、今のところ、べつに急いで歸らなければならぬといふやうな、用事があるわけではないのだし、それに暑くなく、寒くなく氣候は丁度よし空気のいい田舎道を、皆なでいつしよに歩いて歸るのは、とても楽しいぢやないの。この頃では都會の人たちの間にだつて、歩くことが流行つてゐるといふぢやないこと？　ハイキングとか、何とかいつて、わざわざ山や、田舎に出かけて来て、女でも子供でも、歩くんだつていふぢやないの。」

見兼ねたやうにとし子が、傍から口を出すと、

「ほんとうに、その方がいいよ。草臥れたら、どこでだつて休めばいいのだし、ゆつくり歩く方が、面白いぢやないか。」

と、順吉も調子を合せた。

「さう。——では、仕方がないわ。歩くことにしませう。」

千代子は、皆なが口を揃へて、歩くことを主張するのに、その上自分ひとりだけが、強情張つてタクシーに乗らうとは言へなかつた。

——毎日、きまつて熱はあるし、その上、咳は頻りに出るし、身體はひどく怠る。タクシーに乗りたいといふのは、父を初め皆なが思つてゐるやうに、何も贅澤のためばかりではなかつたけれども、どうも仕方がなかつた。

故郷の土

千代子は、敬作をステエションに見送つたその日から、急に寝込んでしまつた。——町から村まで歩いて歸つて来る時にも、しきりに咳き込んで、顔が眞赤になるかと思ふと、すぐにまた、草の葉のやうに、蒼ざめた顔色をして、皆なといつしよに歩くのが、いかにも苦し

さうだつた。ともすると遅れがちで、時々立ちどまつては、せい／＼と深い息を吐いてゐた。

「気分がわるいんぢやないの？」

とし子が心配して、傍に寄つてはやさしく聞くと、

「うん。」

と、千代子は頭を掉つて、寂しさにニツコリして、

「何でもないわ。」

つとめて元氣さうに言ふ。

「だつて、とても顔の色がわるいわ。——眞蒼よ。」

とし子は、眉をひそめた。

「この頃は、いつでも斯うなのよ。今だけぢやないわ。」

「病氣ぢやないの？」

「いゝえ。」

何氣なく言つたけれども、千代子は自分の身體のことには自分でハッキリ氣が附いてゐた。

でも、強ひて病氣に、負けまいとしてゐるのであつた。——勝氣な千代子は、單に病氣に負けまいとするばかりでなく打ち勝つとしてゐた。今度斯うして田舎に歸つて來たのも、一つは自分の病氣を自覺して、征服するためだつた。

家に歸つて來た時には、既に十二時過ぎてゐたけれども、千代子はお腹が空かないからと言つて、箸を取らうとしなかつた。——母のお房が心配すると、父の吾助は、自動車に乗らなかつたことを根に持つて、そのために千代子は、まだふくれてゐるのだと誤解して、苦り切つてゐた。

「打つちやつておいた方がいい。」

吾助は、母のお房が眼も見えず、身體の自由もきかないのに、千代子のことをいろ／＼氣

を揉むのを、さう言つて叱りつけるのであつた。

「どこもわるいことなぞあるものか。我儘病氣だ。」

口でさう言ふばかりでなく吾助は本當に、さう思つてゐた。

千代子は、どんなに気分がわるくても、床に就くのはイヤだつた。今までも頑張り通して來たし、殊に、昨夜遅くなつてから歸つて來たばかりの今日、床に就くなんて餘計イヤだつた。

出来るだけ頑張るつもりだつたけれども、たうとう堪へられなかつた。——久しぶりに自分の家に、両親の傍に歸つて來たので、安心して氣の緩みが生じたのか。それとも長い間氣を張りつめて、都會で無理な生活をつゞけてゐた疲労が、今になつて一時に出て來たのか。或ひは病氣が、急に悪化したのか、それはどうだか分らなかつたけれども、最早やいかに辛抱しても、起きてゐることが出来なかつた。

「わたし、ちよつと寝ますけれども、心配しないでね。」

母が氣を痛めないやうにさう言つて、自分で母の寢床に並べて蒲團を敷くと、枕を並べて寝てしまつた。

「長い間、馴れない東京でなど暮らして來たんで、きつと疲れが出たんだよ。——二三日、ゆつくり寝てゐれば、そのうちには癒るよ。」

お房は、娘の蒼ざめた顔色も見えなければ、以前とは、すっかり變つて、憔悴した姿も、自分の眼で見ることが出来ないで、そんな暢氣なことを言つてゐた。

でも、千代子は、それ切り寝ついてしまつた。

明日こそは、と思ひながら、二日経つても三日経つても、起き上ることが出来なかつた。

ちやうど野良の仕事は、だん／＼忙がしくなつてゆく頃だつた。吾助は一人で、毎日、晨はまだ薄暗いうちから、夕は星を頂いて歸る時分まで、畑に出て一心不亂に働いた。でも、年は取つてゐるし、身體は餘り壯健な方とは言へないし、たつた一人の働きなどたかが知れ

たものだった。廣い畑を眼の前に見ながら、いくら働いてもく、仕事の効果は眼立たないのである。

さすがに辛抱づよい吾助も、どうかすると氣をクサらせることもあつたが、しかし、すぐに元氣を取り直した。——それに敬作は、もう戦地に行つてゐるのであつた。二三度手紙が来たが、どの手紙にもく、畑のことを心配して書いてないのはなかつた。現地で生命を捨て、戦ひながら、しかも故郷の土のことが、瞬時も念頭から去らないのが、よく分つた。

(戦地で、血を流して戦つてゐる兵隊さんのことを思へば——)

さう思ふと吾助は、氣をクサらせてゐるところではなかつた、持ち前の辛抱づよい性質のところへ、新しい勇氣すら湧くのであつた。更に一層、朝は早く、夕方は遅くまで、寸刻の間も惜しむやうにして、精限り根限り働いた。

(とにかく斯うして、身體だけでも丈夫で、一人前に畑仕事が出来ることだけでも、ありがたいことだ。)

謙遜な氣持から、深い感謝の念を以て、来る日もく黙々として、働きつゞけるのであつた。

「お父つさんや。お前さま一人だけ働かして、わし等は斯うして寝てゐて、ほんとにすまなかことだな。」

お房は、良人に詫び、そして慰めるのであつた。

「何んの！」

吾助は、女房に氣を揉ませるのが、とても辛かつた。

「わしはこの頃、めつきり丈夫になつたからな。畑に出て働くくらゐなことは、何でもない。」

そして、今日はどれくらゐ耕したとか、何の蒔きつけが終つたとか、その日／＼の仕事の出来上りを、お房が安心するやうに、話して聞かせた。

——お房は、眼は見えないけれども、氣候が暖かになると共に、痼疾の神経痛の方は、一

時治まつたので、家の中の出来るだけのことは、ごそくと取りとめもなく働いてゐた。
たゞ、千代子だけは、三週間経ち、五週間過ぎても、どうしても起きあがらないのであつた。

(醫者に診てもらつたら?)

と、すゝめられても、どういふわけか千代子は、

「いいのよ! わたし醫者になんか診てもらはないからね。」
と、頑固に拒んだ。

敬作の手紙

應召した敬作からは、初めのうち二三度ばかり、簡単な便りがあつた切り、その後、まる三月以上の長い間、杳として消息がなかつた。

初めの二三度の便りといふのは、所屬の部隊に無事入隊したといふ知らせの端書と、それから半月ばかり経つて、非常に元気で、毎日猛訓練を受けてゐるから、安心してくれといふことゝ、時間に餘裕がなく、度々は手紙も出せないからといふことゝを、簡単に書いた手紙とであつた。

その次ぎに十日ばかりして、もう一度手紙が来たが、それは敬作の所屬部隊の所在地から出したものではなく、はるかに〇〇〇から、今、祖國の地を離れて、大陸に渡らうとする時に、そこで書いて出した手紙だつた。——もちろん軍事郵便だから、どこで出したといふやうなことは、ハッキリ分るはずはないし、そんなことは手紙にも、書いてはなかつた。でも、三本の手紙の中では、その手紙が一番長く、敬作の氣持や、覺悟のことも、詳しく書いてあつた。——その意味をこゝに、掻い擱んで記して見ると、次ぎのやうな要領だつた。

先づ、いよく海を越えて、戦地に臨むべく、これから汽船に乗り込むところだといふ書き出しで、既に今まで何度も繰返して述べたことだが、一死君國に報ずる覺悟だから、生き

て再び祖國に見え、故郷の土を踏む時があらうとも覺えられない。それにはちやうど幸ひにも、ほとんど奇蹟的に千代子が、自分の應召前夜に、何も知らずに偶然、故郷に歸つて来たことである。いろ／＼精しいことも話したかつたが、何分咄嗟のことではあり、自分の考へもハツキリとは決つてゐなかつたし、時間の餘裕もなく出發してしまつたが、その後、いろいろに考へ、決心したことを、こゝに書き送るから、よろしく皆なで相談した上、然るべく取計らつてもらひたいと書いあつた。

その敬作の考へといふのは、自分と千代子との許嫁の約束は、こゝに改めて解消するといふことゝ、そして千代子には適當な相手を見つけて、なるべく早い中に結婚させて欲しいといふことだつた。——それには稼業の點からいつても、自分とも親友の間柄のことだし皆にもその性質や、素性がよく分つてゐることだから、あの順吉が一番いゝと思ふと書いてあつた。

順吉ならば、ちやうど三男のことだから、婿養子に出て、他家の跡を繼ぐことだつて出来

る身の上だし、たゞ、順吉が承諾さへしてくれればいゝことであると思ふが、それは順吉としても、自分の見たところでは、決して千代を嫌ひではないと思ふ。この手紙と同時に、順吉にも手紙を出して、このことは自分からも頼むけれども、是非これを實現させて欲しい。——さうして二人で心を合せて家業に勵んでさへ貰へれば、病身の両親のことも安心だし、折角、今まで丹精して来た田や畑に雑草を蔓こらせ、荒すやうなことがなくてすむと思ふ。幸ひにして自分が、無事に凱旋出来るやうな場合があつたら、その時はその時のことゝして、また考へがあるけれども、しかし、そんなことは百の中の一つである。——後顧の不安なく、自分に十分の働きをさせるために、どうぞこのことを實行して貰ひたいと、切々たる衷情を披瀝して、眞心を籠めて書いてあつた。

敬作から、その手紙が来た時には、先づ父の吾助が讀み、そして眼の見えない母のお房に讀んで聞かせ、それから、寝てゐる千代子が讀んだ。

「千代子、お前、どう思ふだ？」

しばらく経つてから、吾助は重々しい唇を開いた。

——寢床の中で、手紙を讀んでしまつてからも、千代子は蒼ざめた顔を、石のやうに固くして、血の氣の褪せた唇を、ブル／＼と、かすかに慄はせ、熱にうるんだ眼を、神經的にキラ／＼かゞやかして、じつと宙を見つめてゐる切りだつた。

「どう思ふつて？ 何をなの？」

千代子の濡れた臉が、かなしさうに瞬きした。

「敬作の手紙に、書いてあることだ。」

「こんなこと……どうにも仕方のないことだわ。」

千代子は吐き捨てるやうに言つたが、かすかに唇が慄へてゐた。

「敬作が心配して、こんなことを考へるのも、無理はない。」

「だつてお父つさん。今更こんなムシのいゝことが、出来ると思つて？ いくら順吉さんが、人がいゝからと言つて、こんな身體になつたわたしを……こんな病氣の貧乏人のところ

へなど、何を物好きに、お婿さんになぞなつて、来てくれるはずがないぢやありませんか。」
千代子は、自嘲的に言ふと、ヒステリックに顔を歪めるやうにして、甲高な笑ひ聲を立てた。

「それは今更、厚かましく言ひ出せる筋合のことでもなし、たとへ順吉さんの方から、何と言つて来てくれたところが、敬作にたいする義理から言つても、こんな勝手な眞似を、敬作の出征の留守中に、出来るわけのものではない。」

吾助が、ねつちりした調子で、分別くさく言ふと、さつきから黙つて、傍で聞いてゐたお房も、この時やうやく言葉を挟んで、

「さうだとも／＼、お父つさん。——どんな辛抱をしても、わたしたちは敬作が無事に凱施して来るのを、待つてゐなければならんぞね。」

と、健氣に言つたが、見えぬ眼にあふれる涙を拭ふと、更にこの問題の結着でも附けるやうに、

「若し、敬作がお國のために名譽の戦死をするやうなことがあつたら、その時はその時のことにして、また改めて考へることにしたらい。今から敬作の代りに、千代子の婿のことを考へるなど、氣持のよくないことだ。わたしは、千代子の婿は敬作だと、千代子を産んだ時からさう決めてゐるけに、どんな辛抱でもして、その時の來るのを待つとる。」
と、力づよく言つた。

内地と戦地

農家では大事な時きつけや、植ゑつけ、施肥から除草と、とにかく敬作の留守の家でも、野良の仕事は順調に進んで行つた。もちろん、老いて病弱な吾助が中心になつて、一生懸命に働いたけれども、それで間に合ふはずはなかつた。

順吉を始め、とし子や、その一家の人々、それから村の人々が力を合せて、手傳つてくれた。吾助が骨身を碎くやうにして働く上に、村の人たち大勢の協力のお蔭で、敬作が戦地で

も絶えず心配してゐるやうに、田や畑に雑草を生やして、荒廢させるやうなことはなかつた。

むしろ稲でも、その他の作物でも、敬作の家の田畑が、村中で一等の出来栄えだつた。氣候もいゝし、天氣工合もよく、その年は一帯に作物の育ちが眼ざましく、秋の收穫時の豊作を豫想させるものがあつたが、その中でも吾助の家の作物は、誰の眼にも見事な出来だつた。

(出征軍人の留守中の田や畑を、荒れさせるやうなことがあつちや、村中の者の顔にかゝはるぞ。)

口に出しては言はなくても、共通のその氣持と、その眞心とが、吾助の田畑の仕事を手傳ふ場合に、皆な的心を支配し、仕事の上に現はれた。誰も彼も、自分の田畑の仕事に働くよりも、一層忠實に身を入れて、熱心に働いた。

吾助は吾助で、村の人たちのその親身な助力が、嬉しかつた。

(これといふのも、敬作がお國のために働いてくれてゐるお蔭だ。)

これも口に出しては言はなくても、村の人々の親切にたいし、わが養ひ子の敬作にたいして、こゝろの中では手を合せんばかりだった。

(この親切と、この恩とを、疎かに思つちやならない。)

と、更に必死になつて、仕事に勵むのだつた。

敬作が故國を離れる時に寄越したあの手紙——あれと同じ意味の手紙を、順吉も受取つたので、それを讀んだ順吉は、すぐに吾助の家に駆け附けた。

「敬作君から、こんなことを言つて來たけれども、しかし、こんなをかしながら、出来るものぢやない！」

順吉は、三人の揃つてゐる前で、きつぱりした調子で言つた。

「それは僕は、千代子さんを嫌ひぢやない。本當を言へば好きだ。しかし、僕が、いくら千代子さんを好きだとしたところで、千代子さんは生れた時から、ちゃんと敬作君といつしよ

になることに、決められてゐる人だから……どうなるものでもないし、また、どうしやうと思つたこともない。妹と同じやうに、たゞ好きだといふだけだ。それを敬作君が出征したのをい、ことにして、千代子さんの婿になるなんて、そんなことは僕には出來ない！僕は、そんな人間ぢやないつもりですから！」

と、率直に言つたが、べつに氣をわるくした様子も見えなかつた。

「しかし、敬作君が、これほど心配してゐることだから、本當は婿にはならなくても、婿になつた氣で、一生懸命に働きます。また、小父さんも、小母さんもそのつもりで遠慮なく、僕には何んでもさう言ひつけて下さい。あはは、ハハハ。」

と、蟠りもなく笑つた。

實際に蟠りのない證據には、それから後も、本當に親身になつて、いろ／＼働いたり、盡したりしてくれた。

敬作からは、日本を離れる時に、あゝいふ手紙を寄越したまま、三ヶ月餘りも便りがなか

つた。

どこに上陸したものやら、どこで戦つてゐるものやら、どの方面に行つたものやら、そんなことはかいもく、何も分らなかつた。前の手紙に、これからは時々でも、手紙が書けるものやら、書けないものやら、それも分らない。だから若し便りが出来なくても、それは無事でゐるからだ、さう思つてくれと書いてあつた。

それで一家の者も、村の人たちも、長い間一通の手紙が来なくても、それは無事でゐるか、らだと思つてゐた。——負傷するとか、戦死するとかいふやうなことがあれば、もちろん軍から、それ／＼通知があるはずだし、そんな通知もない以上、無事であると思はねばならなかつた。

杭州灣の敵前上陸が、新聞や、ラヂオなどを通じて大だに報道され、國民の血を湧かせたから、凡そ二ヶ月近くも経つてからだつた。初めて敬作が現地で書いた手紙が届いた。それで敬作も、杭州灣に敵前上陸をした兵隊さんの一人であることが分つた。今、〇〇を眼ざ

して進軍中で、杭州でこの手紙を書いてゐるといふこと、元氣だから安心してくれといふこと、大陸の麥畑が、とても／＼廣くて、想像に絶してゐること、この廣大な麥畑も、我々の手に作らせれば、もつと／＼立派な麥を作つて見せるのだが……と、そんなことが書いてあつた。

敬作からその手紙が届いたのは、その地方の農家では、どこの家でも、ちやうど取り入れに忙しい時分だつた。

夏中、寝たり、起きたりしてゐた千代子は、秋口に偶々風邪を引いたのが原因になつて、また、どつと床に就いてしまつた。——高い熱が、毎日つゞいて、餘程苦しうだつたが、それでも、誰が何と言つてすゝめても、やつぱり醫者には、診て貰はうとはしなかつた。

「わたしには、この病氣のこと、よく分つてゐるから。」

と、何もかも、すつかり諦め切つたやうに言つて、寂しさうに、微笑を浮べてゐるのであつた。

その上、押し返しては、誰もすゝめられなかつたし、すゝめても、無駄だつた。

村に歸る日

山裾を縫ふやうにして、川幅凡そ二十間ばかりの川が、鉞をくゞり、森を突き抜けて、曲りくねつて流れてゐる。この川は、もつと上の村から流れ落ちて来て、町の方までつゞいてゐる。

川幅は二十間ばかりあつても、しかし、その川幅いづばいに、水が流れてゐるわけではない。不斷は、あつちにうねり、こつちに曲りして、廣い川原を帯のやうに走つてゐる小流れである。それが大雨でも降つた後だと、水嵩が増して、川原いづばいに擴がるのである。しかし、川上に堰を拵へて、用水に引いてあるのと、(敬作の家の前を流れてゐる小溝も、その水である。)水源が浅いので、この川を流れる水量は、極く少いのである。

廣い川原には、人間の拳くらゐの大きさの石ころが、ゴロゴロころがつて、春になるとス

ギナだとか、ツクシだとか、ツバナのやうな雑草が生へるし、夏の宵になると、月見草が咲いて、大きな螢が、幽幻な光りをボカリ／＼放ちながら、流れの土や川原や、土手のまはりを、あつちこつちと群れ飛ぶのであつた。

秋——といふよりも、もう初冬の夕暮れだつた。

遠く近く、四方を圍んだやうになつてゐる山々の木の葉は、既にすっかり紅葉し盡してゐた。中には葉を振ひ落して、枯木のやうになつてゐるものもあつたし、その合間々々には、常磐木の緑りも見えたが、一番遠くの高い山脈は、雪に包まれてゐた。

とし子が箆を背負つて、土手づたひに歸つて来ると、川原の流れの傍に、しよんぼり立つてゐる女の姿が、はるかに遠くの方から見えて来た。

初めは、それが誰だか、たゞ、(見馴れない人のやうだな。)と思つてゐたのが、近づいて見ると意外にも、重態で寝てゐるはずの千代子ではないか。

「おや、千代子さん！」

とし子はびつくりして、思はず土手の上に歩みを留めると、呼んだ。

「……………」

でも、千代子は、チラと振り向いて見た切り、黙つてゐた。——その顔は、夕方の光線のせるばかりでなく、血の氣といふものが一滴もなくなつたやうに蒼白で、幽霊のやうに憔悴してゐた。

「どうしたのよ？」

「……………」

「どうして一人で、こんなところに立つてゐるの？」

「……………」

何を聞いても千代子は、強情に黙り込んでゐる。

とし子は、だん／＼氣味がわるくなつて來たといふよりも、恐ろしいやうな氣がして來た。でも、このまゝ、逃げ歸つてしまふわけにもいかない。

「あんな、一人で出歩いて、もう大丈夫なの？」

と言ひながらとし子は、籠を背負つたまゝ、自分も土手から川原に降りて、千代子の傍に近づいて行つた。

「あたし、とし子さんに、お話があるの……」

と言つて、千代子はじつと、相手の顔を見つめた。

今にも、よろ／＼とよろめいて、倒れさうになるのを、やうやく我慢して、立つてゐるらしかつた。そして、そのフラフラしたやうな身體は、風にをの／＼木の葉のやうに、ブルブル慄へてゐた。

「え？」

とし子は、餘りに眞剣な眼つきで、一生懸命に見つめられたので、思はずギョツとして、息を呑んだ。

「あんな、敬作兄さんと、結婚してくれない？」

「えつ。」

「兄さんが、無事に凱旋して来たら、結婚すると、約束してくれない？」

「まあ！」

とし子は、顔を眞赤にして、しどろもどろになつたが、

「千代子さんは、突然、そんなことを言ひ出したりして、どうしたといふの？ 何を急に思ひ附いたの？」

と、それでもやうやく、氣を落着けるやうにして言つた。

「わたし、こんなことを、突然言ひ出したのでもなければ、急に思ひ附いたわけぢやないの。」

喘ぎ／＼言つたが、千代子は行きなりはげしい感動を、自分で制御しかねたやうに、つととし子の手を取つて、

「わたし、知つてゐたのよ。疾うから、よく知つてゐたのよ。」

と、とし子の眼を一生懸命に、覗き込むやうにした。

「えつ、何を知つてゐたの？」

「かくさなくても、いゝのよ！ わたし、今度歸つて来たら、あなたはもう敬作兄さんのお嫁さんになつてゐらつしやるとばかり思つてゐたの。」

「まあ！」

とし子は、色を失つて、それ以上口も利けなかつた。

「それだにお二人は、結婚してゐらつしやらなかつたでせう。わたし、意外に思つたわ。」

「……………」

「二人は、わたしがゐなくなつたのに、なぜ結婚しなかつたの？」

「そんなことを言つたつて……………」

とし子は言ひかけて口籠つて、今にも泣き出しさうになつた顔を、低く俯垂れてしまつた。

「あんな、兄を、あんなに愛してゐらつしやるぢやないの？」
「まあ！」

とし子は顔をもたげると、呆れたやうに眼を見張つた。
「わたし、知つてゐるわ。」

千代子は言つて、蒼白い顔に、ニツと微笑を浮べた。

「どうして？」

「それくらゐのことが、分らないと思つてゐるの？」

「……………」

「それが分つたからこそ、わたし家出したのよ。」

「まあ。」

「お二人が、いつしよになるやうにと思つて。——それだのお二人は、結婚しないんですもの！」

「ぢや、あなたは……あなたが家出したのは、さうだつたの？」

「え、う！」

千代子は、つよく頷いたが、また、かなしさうに、

「わたし、今度は……近い中に、遠くへ行かなければならないのよ。もう二度とは、歸つて來たいと思つても、歸つて來られないところにね。」

と、聲を慄はせて言ふと、両手で顔を抑へて啜り泣いた。

「そんな、心細いことは言はないで。——元氣を出して、よく養生をして、早く快くなつてね！」

「わたしには、よく分つてゐるわ。自分の身體が、もう駄目だといふことが……だから、今の中、とし子さんに、よく頼んでおきたいと思つて……ね、兄さんが凱旋したら、二人で結婚して。そして、わたしの分も、いつしよになつて、とし子さんが愛して上げて。父や母のこと、おねがひしますわ。」

「まあ、今からそんなことを言つたつて……」

「今、言つておかなかつたら、もう言ふ時はないのよ。ね……ね、おねがひしてよ。」

言葉が杜切れ／＼になつて、聲もかすかになつて、千代子はやうやく言つたかと思ふと、急にはげしく咽せつぽく、咳き込んだ。そして千代子は、あわてゝ袂から白いハンカチーフを出したかと思ふと、唇を抑へた。——見るとそのハンカチーフが、忽ち緋牡丹の花のやうに眞赤に染つたが、千代子の身體は、へた／＼とこの川原に、崩折れてしまつた。
「あつ、千代子さん。」

とし子はびつくりして、背負つてゐた籠をその場に放り出すと、夢中になつて千代子の身體を、自分の膝の上にかき載せて、

「千代子さん／＼。しつかりしてよ。誰か来て！ 千代子さんが大へんだから。」
と、叫びつゞけてゐた。

×

×

×

×

×

×

杭州灣の敵前上陸から、杭州大會戦に参加し、漢口攻略戦では、殊勳甲の働きをした敬作は、そこで身に數彈を受けた上、更に右脚を一本失はなければならぬやうな傷を負ふた。そして一旦、野戦病院に收容されたが、ちやうど、應召一ヶ年目には、内地の陸軍病院に送還された。

とし子は、兄の順吉に連れられて、わざ／＼面會に出かけて行つたが、母のお房は勿論、父の吾助も、自分では行けなかつた。

——脚は一本失つたけれども、しかし敬作が名譽の戦傷兵として、村に歸還して來るのも、やがて間もないだらうといふことである。

恩おんを返かへす日ひ

父と子

「よく歸つて來た。目出度い〜。一ついかう。」

父は、上機嫌だつた。いつも氣むづかしく肩根に寄せてゐる立皺がとれて、引緊つた唇も綻びた。

親ひとり子一人である。そのたつた一人の息子の歸還が、どんなに嬉しいのか。

「ぐつと一息に、やつたらどうだ。戦争に行つて來ても、この方の腕は、同じことだと見えるな。」

千八百年代のウキスキーである。信策が應召した時、三本残つてゐた。さつきサイド・ポルトを見ると、やつぱり三本並んでゐた。

「早いものだ。もう二年になるのう。今になつたから話すのぢやが、お前の出征中は、一滴の酒も飲まなかつたぞ。伴が前線で苦勞して戦つてゐるのに、いくら親でも、銃後で暢氣に

酒なんか飲んで、相すまんと思つてな。一旦、祖國に捧げたお前だ。無事に歸還出来るなどとは、露さら豫期しないところぢやつたし、前線と銃後の違ひこそあれ、わしも戦地のお前たちと一しよになつて戦つてゐる氣持ちやつた。それもお前が、戦地に行つてゐる間だけではない。若し、お前が戦死したら、わしは一生涯酒は飲まないと、覺悟してゐたのぢや。それが斯うして、無事に歸つてくれた。お前の顔を見て、わしは再びグラスを持つことが出来る。はは、ハハハ。こんな目出度いことはない。」

その目出度い日を、親子水入らずに祝さうとて、斯うして二人きりで始めた晚餐だつた。出征の時には、殆んど何も言はずに送つてくれた父である。戦地にゐる間も、餘り便りはくれなかつた。

でも、信策には、父が何も言はないでも、父の心はよく分つてゐた。今、改めて父の覺悟のほどを聞かされると、思はず眼がしらが熱くなつて來た。

「一ぱい注ぎませう。」

信策は、慌て、視線を反らすやうにして、空になつてゐる父のグラスに注いだ。

父の達之助は實業家だし、信策は父の仕事とは全く縁の遠い考古學を専攻してゐた。達之

助は二三の會社にも、重役として關係してゐたが、現在、最も力をそゝいでゐるのは、南洋護謨會社である。その社長で、殊に護謨事業は時局下、重要産業の一つなので、達之助は職域ご奉公の趣旨からも、この會社の仕事に對しては、全く文字通りに獻身的だつた。

「わしの仕事も、いよく發展の一途を辿つてゐるばかりでの。お前は安心して、自分の學問の道に専心してくれ、ばえ、のぢや。若し、これから研究のために金が必要ながあれは、さう言つてくれ。いくらでも出してやるよ。どうせ國家のお蔭で儲けさせて貰つとるのぢや。國家のお役に立つことのために役に立てるのなら、いくらだつて投げ出すぞ。」

父は、かなり酔うてゐた。でも、酔つた紛れに、いゝ加減なことを言つてゐるのでないことは、信策によく分つてゐた。

「どうぢや？ 二年間の轉戦で、中支から南支と進撃し、杭州灣とバイアス灣と、空前の敵

前上陸に、二度も参加してゐるのぢや。するぶん危険なことも、あつたやう？」

父は、本當は早くそのことが、聞きたかつたのかも知れない。

「僕が斯うして無事に、歸還することが出来たのも、實は、一人の戦友のお蔭なんです。」

「ほう。」

「その戦友のお蔭で、僕は生命拾ひをしたんです。」

「つまり、お前の生命の恩人ぢやな。」

「さうです。僕は早速明日にも、その恩人を訪ねたいと思つてゐます。」

「それは、早い方がえゝな。それで、お前が助けられたといふのは、どんな話だ？」

「杭州灣に敵前上陸をして進撃中、〇〇山の戦闘の時のことでした。」

信策が語り始めると、急に父は緊張した。

火災の後

信策は、自由ヶ丘の屋敷を出ると、省線で二度も乗り換へて、高田の馬場で降りた。そして人に聞き／＼、やうやく高田南町五百六十番地、加宮謙吉の家を探し當ることができた。

だが、最後に環状線道路の傍の交番で聞いた時、

「うむ。昨夜おそく失火して、焼けた家だな。」

若い巡査が町内の地図を見ながら言つた時には、信策は餘りの事の意外さに、一時は呆然としてしまつた。

「加宮謙吉といふのは、タイヤ工場ぢやらう。昨夜、燃えてしまつたな。家も工場もありませんよ。」

と、言はれても信策は、加宮の家が果して、タイヤ工場かどうか、そんなことは知らなかつた。〇〇山の戦闘の砌り、加宮上等兵は班長の信策のために、殆んど身代りになつて、大腿部に貫通銃創を受けた上、迫撃砲の断片で、左手と肩のあたりに、數ヶ所の負傷をし

た。一先づ野戦病院に收容された後、日本に送還され、負傷が全癒してから、そのまゝ不具の身を解除になつてしまつた。

信策にとつては、戦友でも、生命の恩人でもあつたに違ひなかつたが、お互に職業や、身の上など、一度も話し合つたことがなかつた。その後も時々手紙の往復はしたし、殊にその妹の幸江からは、度々慰問の品やら、手紙やらを貰つたし、親しくお禮の手紙を出したことも、度々だつた。でも、家で何をしてゐるかといふことなど、まるきり思つても見なかつたし、知りもしなかつたのは、戦場ではそんなことなど、實はどうでもいゝことだつたらだらう。

「タイヤ工場だか、どうだか、そのところは分りませんが……焼けたとすれば、では、どこか立退き先でも、分らないでせうか。」

「さあ、そこまではこちらには、まだ分つてゐないが……とにかく現場に行つて、聞いて見るんですな。」

と言はれて信策は、教へられたまゝに急いで行つて見た。すると、なるほど、その一廓は、惨憺たる焼け跡になつてゐた。まだ、假りの圍ひも出来てゐない有様だつた。ところどころに柱や、桁のやうな木材の焼け残りが、消化の水にぐつしより濡れながら、ブス／＼と白い煙を出してゐるし、びしょ／＼に濡れた灰の中に、壁土が崩れたり、竈や、釜のやうなものも、眞黒になつて轉がつてゐる。一定の間隔を置いて、幾臺もの機械が据ゑつけられたまゝ、焼け残つてゐるのは、おそらくそれがタイヤの機械であらう。

果して加宮家、及び昭和タイヤ工場の立退き先きが、焼け残つたトタン塀に、半紙を貼りつけて示されてゐた。見ると、そこから二つばかり数字の若い番地の米屋だとしてある。尋ねてゆくと、焼け跡から直ぐ近くだつた。近火のため道具なども大分運び出したのだらう。店は休んで、家の中はゴタ／＼してゐた。

店先で働いてゐたおかみさんに聞くと、二階に向つて、

「加宮さん。お客さまですよ。」

と、聲をかけてくれた。

「はい。」

若い女の澄んだ、きれいな返事が聞えて、すぐにとん／＼と足音もかるく降りて来たのは、信策はまだ一度も會つたことはなかつたけれども、これが謙吉の妹の幸江に違ひないことは、一眼見るなり、すぐに分つた。兄によく似た面ざしをして、眼元と口もとに、やさしさが溢れてゐる。特に美人といふではないが、淑やかで品がよくて、好感の持てる人柄だつた。

「僕は、牧田信策ですが：：昨日、歸還になつたものですから、早速ご挨拶に伺ひました。」と言ふと、幸江は皆まで聞かない中に、そこにびたりと膝を突いて、

「まあ。ほんとうにようこそ、わざわざいらして下さいました。ご無事で、お目出度う存じます。」

丁寧に三つ指を突いて、お辭儀をした。顔は少し上氣したやうに赧らんで、美しい襟脚の

耳の後の邊まで、ほんのり櫻色になつてゐた。

「あなたが、謙吉君のお妹さんですな。」

「はい。わたくしが、幸江でございます。」

年は二十三四だらうか。應待の態度などにも、悪びれたところがなく、はき／＼してゐる。

「度々慰問品や、お手紙を頂きまして、有難う存じました。實は、あなたにも是非お目にかかつて、お禮を申上げたかつたのです。」

「それは、わざわざご丁寧。」と言つて、頭を下げた。

「今、こちらまで出かけて来て、初めて知つたのですが：：どうも大變なご災難でしたな。」

「はあ。工場の方の粗相から、どうも皆さまにご迷惑をかけてしまひまして、ほんとに申わけないと思つてゐます。」

「それで謙吉君は？」

「兄は、出火のことについて、取調べがあるからといふので、今朝から警察に行つてゐますの。もう歸つてくる時分ではないかと思つてゐるんですけれども。」

「さうですか。折角伺つて、お目にかゝらずに歸るのは残念ですが……では、また伺ふことにしませう。」

「ほんとに、申わけございません。わざわざお訪ね下さいましたのに、生憎、お茶一つ差し上げること出来ませんで。」

「いや、それどころではありません。戦場では兄さんに、一方ならぬご恩を受けたものですから。そのご挨拶に伺つたのですが……お歸りになりましたら、どうぞよろしくおつしやつて下さい。」

その時には信策は、そんな通り一遍の几帳面な挨拶を交したただけであつさり別れてしまつたのであつたが――

愛の神祕

人間の感情くらゐ、當てになるやうでゐて、そのくせ取り留めのないものはない。――信策は、自分で自分の気持ちの動きが、不思議で堪らなかつた。ふと振り返つて我とわが気持ちの深淵を、ちつと覗いて見詰めてゐるやうなことが、屢々だつた。それも、いつ、いかなる時と、決つてはゐない。電車や、バスなどの乗り物に乗つてゐる時でも、研究室のテーブルに向つてゐる時でも、自分の書齋でも、街頭を歩いてゐる時でも――全く取り留めがなかつた。

(不思議だ！)

放心したやうに、ちつと考へ込んだ果てには、口に出して呟くのであつた。――そんな時、いつまでも瞼の裏には、決して幸江の面影が、くつきりと焼き附いたやうに、浮んでゐる。

(そんなはずはない。)

と、否定して見ても、やつぱり心では幸江に對する甘い思ひに浸り、暎の裏に焼き附いたその面影は、消ゆることがないのは、どうしたわけだらう？

信策は、自分が幸江を愛してゐるとは、認めたくなかつた。——こんなに簡単に、もつと極端な言ひ方をすればたわいなく、自分が一人の女を、好きになれるはずがないと思つてゐた。思つてゐたといふよりも、ひとり頑なにこゝろに決めてゐた。

——あれから、まだ三年とは経つてゐないのだ。女との約束に裏切られ、女に絶望し、女を憎み、呪ふことのために、この人生にまで絶望し、救ひがたいニヒルに陥つてゐた自分ではなかつたか。

たま／＼日支事變の擴大、そして應召といふことになつた時、あの場合信策としては、好個の死場所を得たやうな気がした。このまゝにしてゐたのでは、收拾のつかない自分のやうな人間でも、大君の御楯となつて大陸に屍を曝すことができるなら、これに過ぎた本懐は

ないと思つた。それこそ男一疋、生れてきた甲斐があるといふものだ。死なう！ 深く死んで、護國の鬼となるのだ。

自棄半分といふなかれ。いざといふ場合になつて、日本男子としての血に眼覺めたのだ。

だから信策は、人にこそ言はなかつたけれども、心の中では出征の時、生きて再び歸る氣持など、萬に一つも持つてはゐなかつた。それは誰だつて出征に際して、生還を期待する者など一人もゐないに違ひない。でも、信策の覺悟は、また特別だつたと言はねばならない。

戰場に出てゆくことは、たゞ一途に有意義な死場所を求めることだつた。できるだけ働きをして、名譽ある兵隊として、立派に戦死することばかり考へてゐた。たつた一人の父にたいしては、その氣持を察すると、子として、すまないことに思はないわけではなかつたけれども。

○山の戦ひのとき、加宮上等兵の咄嗟の氣轉と、わが身を投げ出しての犠牲に、身に微傷だも負はずに助かつたときには、嬉しいことは嬉しかつたけれども、しかし、生命拾ひを

したことが、嬉しいのではなかった。この危機を生き長らへて、更に少しでもよく戦へることが嬉しかっただけだ。次ぎの死の機会まで、大いに戦へることが――

加宮上等兵が送還され、妹の幸江から慰問品やら、手紙やらが来る度に、いつでも牧田伍長の率ゐる班の兵隊たちは、大喜びで、大騒ぎだった。宛名は決して牧田伍長になつてゐる。でも、手紙は皆なで、何遍でも繰返して讀んでは、その都度新しい感激に打たれたし、慰問品は分けられるものなら何でも、分けられるだけは皆なで分けた。浅草の観音さまから頂いてきたといふお守が、たつた一つだけ入つてゐたときには、一班十四人が籤引きといふ説が多かつたが、

「馬鹿こくな！ これだけは班長一人が、しつかりと肌身につけておくものに決つとる。――それが、送つた人の志だといふことが分らんのか。」

飯田上等兵が皆なを叱りつけると、そのお守を取つて、恭々しく信策の前に差出した。信策は、ちつとも拘泥らず、微笑を含んで受取ると、素直にその場でしつかりと腹巻に納

めた。――それは今でも、そのまゝ肌身につけてゐる。

だが、味付け海苔の罐が出てきた時には「東京の匂ひ」だと言つて、みんなが二三枚づゝ分け合つて味つたし、一摘みの煎茶が入つてゐたときには、早速、全員で、祖國の香りを懐しんだ。不自由な戦地で日本茶の香り！

「二年ぶりだ」と、一口二口吸つたと思ふと、泣き出す者もあつた。

さうして――とにかく牧田伍長の班では、幸江といふと大騒ぎだった。三十歳を過ぎて、既に女房子のある飯田上等兵以外は、思ひ思ひに幸江の優しい女ごゝろをマスコットのやうに、しつかりと胸に抱き緊めるやうにして、どれくらゐる前線の辛勞を慰められもし、勵まされもしたことが知れない。

だが、信策だけは一人、別だった。同じく人の子であれば、優しさは感じもするし、親切な心づくしを有難いと思はぬではなかった。が、一個の男性として、特別な感情に胸をときめかすやうなことは、決してなかつた。彼は、たゞ只管によく戦つて、死ぬ機会を求めて中

支から南支と、大陸の戦野を馳驅して廻つた。

二年間の長い月日を夢の間の短かさに感じて、歸還命令をうけた時には、皮膚は大陸焦けをし、戦塵にこそまみれたれ、身には不思議にも微傷だも負はなかつた。恙なき身を歸還することができた時には、しかし、最早や、出征前のあの信策ではなかつた。言語に絶した戦場の辛酸は、彼の魂の底まで洗ひ淨め、それまでの環境や、教養から第二の天性のごとく身につけてゐたところの餘計な垢を、すっかり擦り落してゐた。全く腹の底からの素朴純真な、一個の日本男子であるに過ぎなかつた。

況んや、裏切つた女にたいする怨恨や、呪咀など、遠い過去の夢といふよりも、強ひて思ひ出さうとして見ても、何の實感もないばかりか、あんなに苦しんだ自分が、をかしいくらゐなものだつた。

それならこそ斯くも容易に、思ひがけもなく幸江の優しい魅力の中に、まつしぐらに飛び込んでゆくことが出来たのだらう。

自分でいくら打ち消して見ても、たしかに幸江を愛してゐる！
何といふ不思議なことだ。——人間の感情といふよりも、男女の愛といふものゝ神秘さよ。

信策は、呆やりとして、いつの間にかそんなことに、思ひ耽つてゐる……

秋晴れの日

二度三度、五度六度と訪ねる度に、焼け跡はすっかり取り片附けられ、工場の地均し、礎石の据ゑつけと、復興の工事が、次第々々に進捗してゆく有様を、直接、自分の眼で見ることもできた。今度は、以前よりも工場を少し擴張して、住居とつゞいてゐたのを、全部工場の敷地に擴げて、それだけ機械の臺數もふやし、職工の人數も増す計畫だといふことだつた。それでは住居がなくなるので、どこか近くに便利さうな借家でも探して入るつもりだといふことだつたが、その借家も時節柄、ナカ／＼容易に見つからないらしかつた。兄と妹

とは相變らざる米屋の二階の不自由な借間生活で、ひたすら工場の復興に一生懸命になつてゐた。

秋晴れの日曜の朝——

信策は、今は改まつて案内を乞ふやうな間柄でもなく、

「ゐる？」

つか／＼と上りこんで、階段を上りきつた一坪ばかりの踊り場から——そこがお勝手の代りにもなつてゐる——がらりと襖を開けると、六疊にも八疊にも、二室の座敷には人の影もなく、

「あら、いらつしやい。」

と縁側から鍵の手に張り出しになつてゐる物干場で、幸江の朗かな聲が迎へてくれた。

その聲を聞いたゞけで、もう信策の若々しい血は踊る。幸福で胸はとどろき、呼吸を弾ませて、われながら別人になつたのではないかと怪しまれるやうな氣持で、自分も縁側に廻つ

て行つた。

すると幸江は、甲斐々々しい襷がけで、白い手拭を姉さま被りにして、今、シャツや、兄のシャツや、自分の肌襦袢などを、さつぱりと洗濯して、物干竿に通してゐるところだつた。

「やあ。日曜日だといふのに、よく働きますね。」

と言ふと、幸江は白い手拭の下から、ぱつちりと涼しい眼を覗かせて、振り返つてニコリして、

「あんまりいゝお天気で、勿體ないと思つて……ちよつと、ご免なさい。今すぐ干してしまひますから。」

「構ひませんよ。何でしたら僕、手傳つて上げませうか。」

「あら、いゝのよ。失禮ですけれども、そこにありますから、兄さんのお座蒲團を敷いて、下さらない。まだ、お客さまのお座蒲團、買へないでますのよ。」

「座蒲團なんか、いるものですか。」

信策は、疊の上にとかりと胡坐を組んだ。

天はどこまでも蒼く、澄み渡つて、本當にこれが日本晴れといふのだらう。二階の庇から覗く空には、一片の浮雲も見えなかつた。この附近はいろ／＼な工場の多いところで、方に煙筒が立つてゐるのが見えた。でも、その煙筒からは、いつももく／＼と黒雲のやうに煙が盛れ上つてゐるのに、今日はそれも見えないのは、第一日曜日で、休みのせるだらう。

しばらく信策は、晴れ渡つた空を見たり、煙も吐き出さずに、ひっそりと青空に聳えてゐる煙筒を見たりしてゐた。さうかと思ふと、チラと幸江の姿に眼をやる。幸江は洗濯物をすつかり竿にかけてしまつて、濡れた襟をきちんと揃へたり、袖を引つ張つたり、裾を叩いたりしてゐた。襷をかけてゐるので、白い、若々しい腕が、二の腕近くまで現はれて、動かす度に爽やかな午前の明るい日射しを受けて、純のやうに光る……すると信策は、まるで眩しいものでも見たやうに、つと眼を反らして、そつと溜息を吐く。

「幸江さん。」

たうとう呼びかけたが、聲を出してその名を呼ぶと同時に、わく／＼してゐた氣持が、落着いた。

「はい。」

幸江の可愛らしい顔が微笑を含んで、こちらを向いた。

「僕は、實は幸江さんを誘ひに、寄つたのですが……」

「あら、どこかに連れて行つて下さるの。」

「多摩川なんか、どうでせう？ どこか芋掘りでもいいし……栗拾ひでもいいですな。」

「まあ素敵。うれしいわ。わたし、どこでもいいの。」

「兄さんは、どこです？」

「工場を建てゝゐる普請場ぢやないかと思ひますが。」

「では、ちよつと行つて、謙吉君にさう言つて、許しを得て來ますから。」と、信策は氣もこ

ころも軽くなつて、弾み切つてゐた。

「え。兄さん、すぐに許してくれますわ。では、行つていらしてね。わたし、その間に、支度をしてゐますから。」

さういふ幸江の、喜びに弾んだ聲を背後に聞いて、信策は驅けるやうにして階段を降りると、工場の普請場まで、一氣に飛んで行つた。

とん／＼かん／＼と、景氣のいゝ金槌のひゞきや、手斧の音が聞えてゐることゝばかり思つてゐたのに、急いで驅けつけて見ると、ひっそり閑としてゐるのを意外に感じた。が、やつぱり今日は日曜日なので、大工たちも休みなのかと、ひとりで決めた。

建前がすんだばかりと見えて、棟には丸竹の弓や、御幣などが、まだ立てたまゝになつてゐる。大貫を纏掛けのやうに十文字に打つけて、筋違にして、骨組みの曲らないやうに、手當てがしてあるだけで、相當に大きな木造の建物が、かなり危つかしいまゝにして、職人は一人も入つてゐない。

中には柱もなく、広い建物の真中あたりに、謙吉は氣拔けのしたやうに力なく腕組みをして、呆んやり突つ立つてゐた。信策が近づいて來たのにも、氣がつかないらしく、振り向きもしない。

「やあ。」

と、聲をかけて信策が寄つてゆくと、謙吉は初て氣がついて、

「お。」

と答へて、振り向いた。

「ぼんやり突つ立つて、いつたいどうしたんだ？」

と聞いたが、信策は自分だけの喜びと幸福に有頂天になつて、相手の顔色も見ず、返事も聞かずに、

「ちよつと幸江さんを、貸してくれないか。いつ／＼よに多摩川畔まで、行つて來たいと思ふから。」

と、つゞけた。

「いゝとも。」

と、頷いて腕組みを解くと、何か言ひたいらしく、一步信策に近づいた。——信策の身代りに傷ついた左の肩が少し歪んで左の手も不自由だし、その時の貫通銃創で、右の脚もいくらか跛を引いてゐる。

だが、信策は、謙吉の何か話したさうな氣配などには氣もつかず、

「どうも有難う。それでは行つてくるから。夕方までにはきつと幸江さんを、送つて來るよ。」

言ひすて、また、急いで驅けるやうにして去つてしまつた。

逆轉する運命

時局の上でも、いまを時めく實業家である父とは反對に、信策はおよそ時代ばなれのした

考古學といふ遠い過去にさかのぼつた時代の人類や、生活状態の研究に没頭する若い一學徒である。だが、歸還すると、ゆつくり休息する間も惜しむやうに、毎日コツ／＼と、研究に通つた。晝間でも電氣をつけなければならぬやうに薄暗く、ほこりくさいやうな、古びた建物の研究室だつた。最近、埼玉縣の貝塚で發掘してきたといふ土器や、石斧や、人骨などの整理に没頭してゐるところへ、小使が信策に來客を報じてきた。加宮謙吉が、訪ねてきたのだといふ。

信策は、わざ／＼研究室に加宮が訪ねてくるなんて、何事だらうと思つた。——多摩川畔に幸江をさそつて、二人のあひだだけには、ハッキリ諒解が成り立つた。でも、幸江は、一應兄に相談してからと、一抹の言葉を濁した點もあつたので、信策は、ちよつと不安だつた。あれから、ちやうど三日経つ。してみれば謙吉は、その返事を持つて來たのだらうか？ 會つて見ると謙吉は、ひどく意氣消沈の様子も見えるし、さうかと思ふと、すぐに興奮した。

「僕は、いよく満洲へ行くことに決めた。」
と、謙吉はいきなり言ひ出した。

「工場は？」

あれほど意氣込んで、新建築にとりかゝつてゐた工場は、いつたいどうするのだらうと思つて、呆れながら聞くと、

「工場は駄目だ。満洲へ行つて、新規蒔き直した。」

怒つたやうに言つて、溜息を吐くと、かなしきうに、

「幸江から話はきいた。君の氣持は有難いが、しかし、僕にはこゝで、妹を幸福にしてやる力がないのだ。」と言つて、涙ぐんでゐる。

よく話をきいてみると、謙吉が出征した直後、父は急死した。その後、工場の経営一切、古くから工場のために働いてゐた支配人が取り仕切つてやつてゐたし、謙吉が歸還後も、肝要なことは、やつぱりその支配人が握つてゐた。

ところが、今度の火災である。支配人の意見では、工場の経営は所詮見込みはない。父の在生中から、ずっと赤字がつゞいてゐるところへ、事變以後、物資の統制、職工の手不足などで、いよく経営は困難になるばかりである。そこへ肝腎の父の死、それから今度の火災と、次ぎつぎにおこつてきた致命的な災難に、もう維持はできさうもない。この際買収してもいゝといふ大企業があるから、その話に應じたらどうかといふのである。

尤も、以前から支配人は、ちよいとそんな話をしてゐたのが、火災を機會にして自分の意見を、強硬に主張し出した。でも、謙吉としては、工場は父の遺業でもあるし、タイヤの製作は、時局下の大事な國策的仕事でもあるし、不具者の歸還兵としては、本當に全身をうちこんでやるに相應はしい仕事でもある。だから、いかなる困難を克服しても、必ずやり遂げずには措かないから！ と、支配人の意見と斡旋とを一蹴した。そして、支配人が頼りにならねば、獨力で！ といふ意氣込みで、火災保険金やら、その他一生懸命に奔走して、やうやく整ふ目當のついた資金を力にして、工場の再興に没頭してゐたのであつたが――

「建前の日、突然、執達吏がきて、假差押へをしてしまったのだ。」

調べてみると支配人が一存で、すつかり譲度の手續きをすました後、逃亡してしまつてゐた。——合法的な手續きで、謙吉としては泣いても笑つても、どうすることもできない。

「さうかと言つて、支配人を罪人にして見たところが、それで工場が元通りになつて、自分の經營に返されるわけではなし——」

考へに考へた末、満洲行きと決心した以上、幸江を一人残しておくわけにはいかない。

「いつしよに連れて行けば、二年や三年で、どうなるといふ當てがあるわけでもなし、君にもすまないし、妹も可哀さうだが、どうぞ諦めてくれ。」

慘憺たる暗い顔をして、泣かんばかりに言はれて見ると、信策はどう言つていゝか、分らなかつた。

「それで、工場を買収したその護謨會社といふのは？」

信策が聞くと、

「南洋護謨會社といふんだ。今、日の出の勢ひの大會社だよ。」

「えつ。」

「知つてゐるのか？」

「うむ……いや。」

信策は、ちよつとまごついて、曖昧に言葉を濁した。

南洋護謨會社と言へば、父が社長として、手腕を揮つてゐる會社であることを、この際加宮の前に明かにした方がいゝか、どうか？ 咄嗟には信策には判断がつかなかつた。

幸福のおとづれ

いよく退引ならない事態だつた。謙吉は應召前に滿鐵で働いてゐた關係もあり、傳手もあるので、滿洲國に行けば仕事の口など、いくらもあつた。

折角、亡父の志を繼いで、經營に一生涯をうちこむ覺悟だつたけれども、それもいつの

間にか肝腎の工場が、他人の所有になつてしまつた今となつては、諦めるより仕方がない。それに満洲國へ行くと決心すれば、何もかも焼いてしまつた火災の後だけに、かへつて簡単だつた。

研究所に信策を訪ねてから、また三日経つてゐた。今夜は出發といふので、支度にかゝつてゐた。

幸江は、一度改めて別れを告げたいと思つて、信策に電話をかけて見たが、研究所にも屋敷にもゐなかつた。旅行中の父の後を追うて、關西へ出かけたのだといふことである。——これ切り會はずに別れるのだと思ふと、さすがに悲しかつた。

もとい／＼焼け出されの假りの住居で、荷物としては何もなかつたけれども、それでも、すっかり荷作りをした行李が二つ、スーツケースが稍々大形なものと小さいのと、それだけを部屋の隅に片寄せた。さて、火の氣もない安物の瀬戸火鉢に、兄妹ふたりで差向ひに、ぼつ／＼と坐つて見ると、今更のやうに部屋は空家のやうにがらんとして、佗しかつた。

出發の時間は近づいて来る。頼んでおいたタクシーが迎ひに來た。米屋の人にも手傳つてもらつて、荷物を二階から降ろさうとしてゐたところへ、いきなり信策が、息を切らさんばかりにして、飛び込んで來ると、

「君たちは、もう満洲國へ行かなくて、いゝことになつたんだ。」

と、言つた。

「えつ、何だつて？」

謙吉が呑み込めなくて、びつくりして反問すると、

「これからも、タイヤ工場を君の手で經營していかなければならない以上、満洲國に行く必要はないんだらう。」

「それは、さうだが……」

「君は今まで通り、昭和タイヤ工場の經營者なんだ。」

「僕には分らない。よく分るやうに、話してくれたまへ。」

「分るやうに今話すから、水をいつばい下さい。」

信策は、幸江が汲んで来てくれた冷水を、コップに一ぱいぐつと飲み干すと、

「實は、南洋護謨會社の社長は、僕の父なんだ。」

「えつ。」

「君の話の聞くと、僕は、父に譯を話して頼まうと決心したのだ。あの時、すぐに研究所から歸つて見ると、父は急用で關西に行つたと言ふ。すぐに後を追つて、やうやく神戸で、父に會へたのだ……」

「あゝ、そんなことだつたのか。」

「父に譯を話すと、もちろん否やのあるはずはない。君は僕の生命の恩人だしね。昭和タイヤの經營は従前の通り一切君に任して、更にどんな援助でも惜しまないといふんだ。どうだ？ これなら君も、何もわざわざ滿洲國に行く必要はないだらう。」

「だが、僕は、いつたいそんな厚意に甘えても、いゝのだらうか。」

謙吉は、感激に聲を潤ませてゐる。

「いゝも悪いもあるものか。元々僕たちとしては、それくらゐのことをするのは、當然だもの。」

「それにしても……」

「もういゝから、何も言はないで。君は、幸江さんを僕にくれることを、承知してくれればいゝんだよ。」

「それは勿論、喜んで承諾するが……幸江のためにも幸福だし、何よりも當人として、望んでゐることだから。」

「ありがたう。幸江さんも、聞いてくれましたね。父も、承知してゐるんです。」

と言つた信策は、傍らに恥含んで、俯垂れて、思ひがけない幸福に慄へてゐる幸江の手を、ひしと取つた。

出文協承認ア100395號



第三十六回配本

昭和十七年六月廿五日印刷
昭和十七年六月三十日發行 (八〇〇〇部)

新作大衆小説全集第三十七卷

日本の女

定價壹圓貳拾錢

著者 中村武羅夫

發行者 加藤雄策
文協會員番號一二七〇二七
東京市小石川區表町一〇九

印刷者 古川一郎
(東京二〇四) 東京市小石川區久堅町一〇八

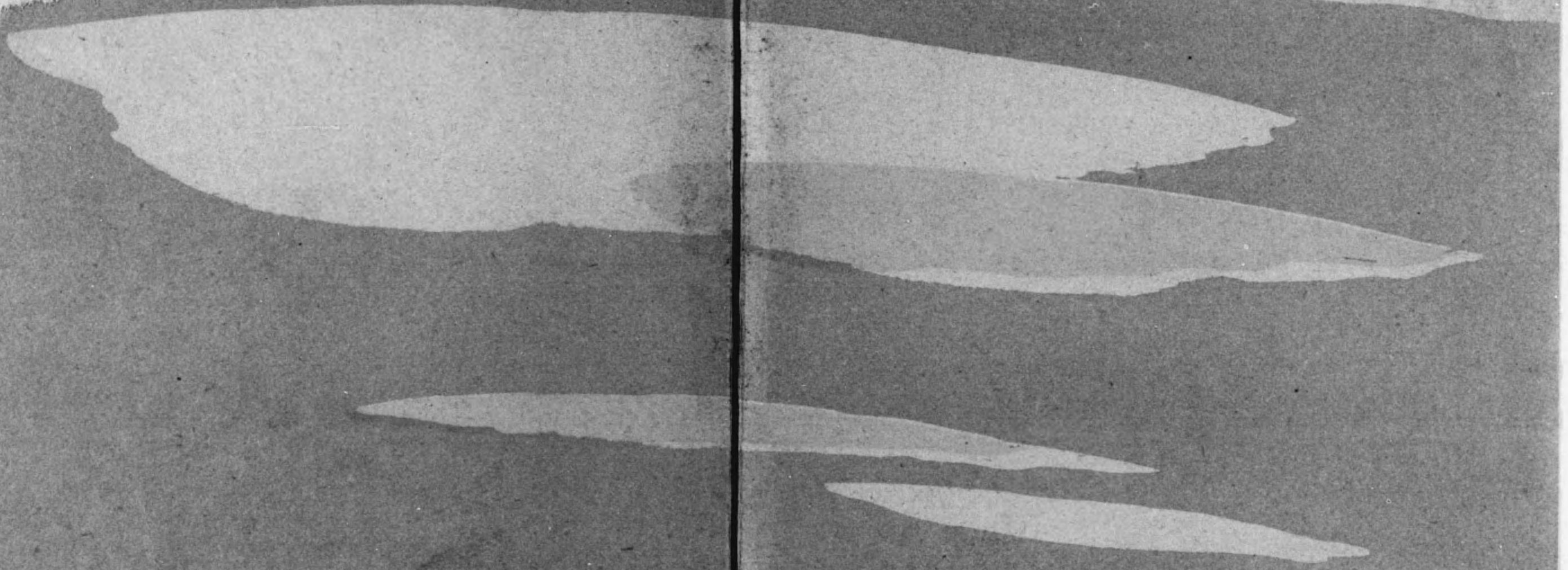
發兌 非閣
東京市小石川區表町一〇九

振替東京三六三三九
電話小石川〇二九二

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

(東京二〇四) 共同印刷株式會社印刷

425
268



終